

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目： 基盤研究（C）
 研究期間： 2007～2008
 課題番号： 19520527
 研究課題名（和文）コミュニケーション能力の育成を目指した中国語授業の開発に関する
 教育心理学的研究
 研究課題名（英文）Educational psychological research on improving student s
 communications skills in Chinese teaching
 研究代表者
 胡 玉華（KO GYOKUKA）
 立命館大学・法学部・講師
 研究者番号：80411164

研究成果の概要：

外国語を学ぶ意義が、コミュニケーション能力の獲得にあることは言うまでもない。これが近年ことさら強調されるようになってきているのは、これまでの外国語教育がその目的を果たしていないという事実を反面から表すものではなからうか。とくに中国語教育の場合、進展いちじるしい英語教育や日本語教育の分野に比べ、この問題への対応がとりわけ遅れているように思われる。本研究はそうした問題意識から、中国語教育におけるコミュニケーション能力の育成について、具体的かつ操作可能な3指導法（場面付き教授法、タスクによる学習指導法、機能重視教授法）を提案し、それぞれの指導法を厳密な実験授業及び統計方法を通じて、その効果を検証できた。また、研究結果は、中国語教育学会誌や東方出版社による刊行されたほか、高校中国語教員研修会などで講演した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野： 外国語教育

科研費の分科・細目：中国語教育

キーワード：中国語教育・コミュニケーション能力・教授法

1. 研究開始当初の背景

（1）中国語教育実践においては、学習者の中国語によるコミュニケーション能力が低下している。例えば、中国語履修者は「日本語を中国語に直す」という通常形式の練習問題を正しく回答することができるのだが、ほぼ同様な「答え」を求められる「設定された

状況に合った文を作る」という形式の練習問題を回答することができない。それは、学習者が必要な「言語知識」は持っているが、それをを用いて、実際のコミュニケーションの場面への「応用能力」は持っていないことを意味していると言える。

（2）中国語教育の研究においては、中国語

の研究が優位を占め、理論に基づいた教授法に関する研究が欠如している。具体的に言えば、中国語教育の研究において、「中国語」そのものに関する研究が優位を占めているが、中国語をどのように教えるのかという「中国語教授法」の研究は依然として多くない。また、教授法についての研究があっても、発音・文法といった「言語知識」を課題としたものがほとんどであり、言語の「応用能力」に関する研究は少ない。さらに、「教授法」に関する研究の多くは、理論根拠の説明・科学的な分析が欠けているため、「研究」というより、「実践の記録」にすぎない。

したがって、学習者のコミュニケーション能力をアップさせるための中国語教育を行うための、教授 学習過程を研究対象となる教育心理学の理論に基づいた、中国語教育研究が必要となる。

2. 研究の目的

学習者の中国語によるコミュニケーション能力の向上を目指し、具体的かつ操作簡単な中国語授業の教授法を開発することは研究の目的である。具体的に、以下の3つの教授法を提案し、実験授業によってその効果を検証するのである。

(1) 「場面付き」学習の指導法

すなわち、中国語の授業においては、文法規則や例文などの「言語知識」を学習者に覚えさせるのだけではなく、その言語表現に合った場面に関する情報(いわゆる、言語使用の状況)をも認識させるという教授法である。

(2) 「タスク」による学習の指導法

すなわち、中国語の授業においては、通常のように、語彙や文法規則などの「言語知識」の学習後、文法・構造・語彙など別々にして練習させるのではなく、あるコミュニケーションの目的を成り遂げるための作業や課題(タスク)を提示し、学習者はグループで取り組んで、タスクを完成する作業の中で、言語使用が促され、言語応用能力が訓練される教授法である。

(3) 機能重視教授法

すなわち、言語構造や語彙を学習者に覚えさせるのだけでなく、それらの「言語構造」を用いて何ができるかというコミュニケーションのための「言語機能」に重点を置く教授法である。

3. 研究の方法

本課題が提案した3つの指導法の効果を検証するために、3つの実験を行う。すべての実験は、仮説を立てる、実験授業を行う、テストを行い、学習後の実験データを

収集する、仮説を検証する、といったプロセスに沿って進める。

また、本課題における3つの実験の仮説の検証法として、教育心理学の研究に最も適した研究法と言われる「構成法」を用いることにする。つまり、目標とする行動(本研究では、コミュニケーションを達成することである)を形成してみることによって、その行動の形成に関係する諸条件(独立変数:各実験の中に仮説として提案した授業法)と行動(従属変数:コミュニケーション能力)との間に成立する未知の因果関係を明らかにする。

3実験における具体的な操作方法を以下のようにまとめる。

(1) 実験1の研究手法

実験1の仮説は、中国語教育においては、「場面付き学習」は学習者のコミュニケーション能力の育成に効果的であろう、ということである。その仮説を検証するために、R大学の「中国語コミュニケーション」クラス(1年間の初級中国語を終え、中級中国語の前期に当たる)の学生を対象に、週に1コマの「場面付き学習」を取り入れた実験授業を全14週行う。2週に1課の進度で授業を進める。課ごとに、スキットの紹介、表現ポイントの説明、スキットの朗読、宿題の発表、という4プロセスを含める。具体的に、1回目では、スキットに設定された場面の流れに沿って、登場人物及び状況を説明しながら、語彙・文構成を紹介する。それと同時に、学習内容となっている重要な表現ポイントについて、教科書にある例文、もしくは教員自身が考えた例文を用いて説明する。その場合は、すべての例文にその「文」が使われる「場面」を付け、学生に「場面」を浮かばせてから、「文」を導入する。1項目に基本的に3つの「場面付き例文」を提示する。2回目では、まず、語彙と文構成を復習しながら、スキットを朗読させ、その後、「場面」を手がかりとして提示しながら、全文を暗記させる。次に、前回の授業に出した作文の宿題を発表させ、必要に応じてフィードバックする。その作文は、通常の形式と異なって、教師が「場面」とその場面に合う「日本語文」を設定し、学生がそれを「中国語文」に直すという形式である。

(2) 実験2の研究手法

実験2の仮説は、タスクに基づいた中国語授業がコミュニケーション能力の育成に効果的であろう、ということである。その仮説を検証するために、R大学の中国語(初級クラス+中級クラス)計4クラスの学習者を対象に、以下の3プロセスに沿って、授業を進行

する。学習段階：通常通りの語彙の提示及び文法の説明、復習段階：通常の文法・構造・語彙などを別々に取り上げて練習させるのではなく、実際に近いコミュニケーション目的を成し遂げるための「タスク」(作業や課題)を学習者に求める。授業中、学習者がタスクを取り組む様子をデジタルカメラやデジタルレコーダーで記録し、授業後、タスクの完成度から学習効果を分析する。

(3) 実験3の実験方法

実験3の仮説は、機能重視の中国語授業がコミュニケーション能力の育成に効果的であろう、ということである。その仮説を検証するために、中国語初学者を対象とし、週に1コマ、一学年を継続した実験授業を行う。すべての授業は、以下の4つのプロセスに沿って進める。通常通りの「本文の訳読」、「表現ポイントの説明」、通常通りの「文法練習」及び「コミュニケーションの練習」、宿題として課毎に設けた「コミュニケーション能力達成の自己チェック」の実施を学生に求め、「これらの文法を習って、これらのことができる」という言語の機能側面を意識させる。

期末に、学生の自己チェック状況を収集し、それぞれの期末テストと合わせて、分析する。

4. 研究成果

学習者のコミュニケーション能力の向上を目指した中国語教育法(学習法・指導法)の開発を目的とした本課題は、平成19年度～平成21年度の2年間をかけて、以下の3つの研究目標を予定通り達成した。具体的に以下のようにまとめる。

(1) 実験1の成果

実験1では、「場面付き学習」が学習者のコミュニケーション能力の向上に及ぼす効果について実践授業を行った。学習効果を各段階で考察するために、実験授業の7週目、14週目計2回テストを行った。テスト内容として、学生自身が「場面」を設定し(設定した場面は日本語で表現する)与えられた「文型」を用いて、その場面に合った「中国語文」を書く課題(3問)を課した。課題の解答文を、正確性(文法形式上正しいかどうか)、適切性(設定した場面に合っているかどうか)、独創性(例文の模倣におおらず、新たな内容を表現し得ているかどうか)という3指標から点数で評価する(満点3点)。その結果は表1に示す。

表1 テストにおける各指標の得点

指標 テスト	正確性		適切性		独創性	
	Mean	S.D	Mean	S.D	Mean	S.D
1回目	1.9	0.9	1.4	0.8	2.8	0.8
2回目	2.4	0.8	2.2	0.7	2.9	0.4

表1からわかるように、2回目のテストでは、正確性・適切性・独創性の3指標とも一回目より上がって、満点の3に近い。また、分散分析の結果、文法的正確性における2テスト間の差が有意であった($F=9.882, p < 0.05$)。場面的適切性における2テスト間の差も有意であった($F=15.194, p < 0.05$)。また、独創性における2テスト間の差も有意であった($F=5.470, p < 0.05$)。以上の結果から、本研究で提案した「場面付き学習」が、学生の言語形式に関する理解力を育成するとともに、言語機能に対する意識を高めることが確かめられた。「どんな場面にどう表現するか」という「機能+形式」の練習は、明らかにコミュニケーション能力の育成につながるものだと言えよう。

(2) 実験2の成果

操作可能なタスクを選択するために、まず先行実践を行い、反復推敲したうえで、以下の4つのタスクを実行することに決めた。

タスク1 自己紹介

対象：初級学習者

目的：タスク・シートの自分に関する情報をもとに、それを相手に伝えたり、また、友たちの情報を得たりすることによって、名前の聞き方、国籍の聞き方、職業の聞き方およびその答え方を練習する。

タスク2 意見を述べよう

対象：初級学習者

目的：身近な人やものを話題に、比較文を使ってお互いの意見を伝え合う。

タスク3 電話で日程を調整する

対象：中級学習者

目的：電話でのコミュニケーションを上手にこなす。

タスク4 買い物

対象：中級学習者

目的：買い物場面でのコミュニケーションを楽しく上手にこなす。

実験クラスにあたるすべてのクラスにタスクを導入し、タスクに取り組むときの学生の発言を記録し、直前に習った知識の正確応用及び以前習った知識の正しい応用できるかどうかを収集したものは表2で示す。

表2 各タスクに取り組む正答率(%)

タスク	1	2	3	4
言語				
直前知識 語彙	100	90	100	100
直前知識 文法	100	90	100	90
既習知識 語彙	100	80	80	80
既習知識 文法	100	80	70	80

表2からわかるように、タスクによる練習形式では、直前に習った知識を用いることが可能である、また、語彙・文法を別々にした練習問題より、以前習った知識もより想起させることが可能である。その結果、「文法説明+文法練習」という現行の中国語指導法より、学習者にコミュニケーション課題に取り込ませ、その課題の解決の過程の中で外国語を理解し使用する機会を与える、いわゆる「タスク中心指導法」のほうが、学習者のコミュニケーション能力の向上につながることがわかった。

そのほか、本実験を通して、タスクの選択、分類、実施する際の注意点などの面について具体的な提案もできた。

(3)実験3の成果

学生に学習した内容を言語的形式的な面ではなく、言語の機能的な面で捉えるため、授業の後、学生に言語の機能でまとめられた「Can-do」指標を自己チェックさせた。自己チェックをした人は言語の機能を意識し、重視度の高い者とし、チェックをしなかった人は言語の機能を意識しなかった、重視度の低い者とする。それぞれの学習者の期末に行ったコミュニケーションテストの成績と合わせて収集したものは表3で示す。

表3 機能重視度と課題解決のクロス表

課題 重視度	コミュニケーション能力			合計
	正解	ほぼ正解	不正解	
高い	56	19	32	107
低い	22	30	41	93
合計	78	49	73	200

表3からわかるように、全体的に、機能重

視度の高い者がまだ多くなく、ほぼ半数の学習者は意識が低いままであった；「コミュニケーション能力」の高い者には「機能重視度」の高い者がほとんどであり、それに対して、「コミュニケーション能力」の低い者には「機能重視度」の低い学生が多かった。さらに、 χ^2 検定を行ったところ、その関連性が有意であった($\chi^2 = 17.505, df=2, p<0.05$)。すなわち、言語機能を重視した学習者のほうがコミュニケーション能力がつく、ということがわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 胡玉華

「コミュニケーション能力の育成を目指した授業づくり 中国語授業における「場面付き学習」の試み」中国語教育(日本中国語教育学会誌、査読有)2008年第6号 1~16頁

〔学会発表〕(計1件)

1. 胡玉華

「学習者のメタ認知を生かした中国語教育に関する実践研究」中国語教育学会第6回全国大会、2008年6月7日 北九州市立大学

〔図書〕(計1件)

1. 胡玉華 東方書店

『中国語教育とコミュニケーション能力の育成 「わかる」中国語から「できる」中国語へ』2009年、182頁

〔その他〕

研究成果の社会貢献

1. 2008年8月

財団法人国際文化フォーラム主催「2008年高等学校中国語教員研修会」講師

2. 2009年8月(予定)

財団法人国際文化フォーラム主催「2009年高等学校中国語教員研修会」講師

6. 研究組織

(1)研究代表者

胡玉華 (KO GYOKUKA)

立命館大学・法学部・講師

研究者番号：80411164

(2)研究分担者

(3)連携研究者